

スタジオ夜話

第98話 スタジオ夜話

「音へのかかわり方」プロオーディオって何？

☆ はじめに

先日筆者は第1回目のワクチン接種に行ってきた。予定通り7月中には接種完了となります。読者皆様はいかがでしょうか。前号でも触れましたがコロナ以外にも異常気象が心配です。皆様がお変わり無く過ごせるよう願っています。

さて今回もプロフェッショナルオーディオについてのお話です。コラムに予定していた道具のお話はまた次回に先送りにします。(すみません) お付き合いのほどよろしく願いたします。

☆ 「音を考える」

プロオーディオって何？ IV

そもそもの話、前号でもお話したようにオーディオそのものにはプロもアマチュアありません。オーディオ機器にはプロ用として高価なものがありますが、これも金銭的な余裕のある方は所有することができます。これはたぶん本誌で扱っているプロフェッショナルオーディオの範疇ではなく趣味のオーディオのハイエンドなものだと思っています。

昭和45年当時筆者の先輩宅にはティアックのR313というコンソールタイプのレコーダーや自作のミキサーがありました。職業はオーディオとは無縁の方です。また読者先輩諸氏はご存じのことと思いますが作家の五味康介氏や新潮社の役員だった斎藤氏もオーディオの世界では有名で超高級なオーディオ機器を使って音楽や音を語っていたことで知られています。音というものに対してプロフェッショナルとしてかかわるのか、アマチュアとしてかかわるのか、録音スタジオや機材は使用されるものなので「かかわる」ものではありません。

「かかわり方」が問題なのです。筆者は

前号でプロフェッショナルオーディオとは「様々な音や音楽ソースを私たちリスナーにより良く提供しようとプロフェッショナルとしてかかわり出来上がった音」と定義しました。

趣味のオーディオは私たちに音や音楽を基本的に提供していません。アマチュアはこの範疇です。昨今多くのミュージシャンが自宅録音の音楽や様々な音をネット上で私たちに発信しています。「いいね！」評価もあり、中には1万回、10万回のアクセスがあるものもあります。私たちにネットを通じて音楽を提供しているのです。

はたして彼らはプロフェッショナルオーディオの担い手なのでしょうか、有料サイト上のものならばプロフェッショナルのミュージシャンといえます。しかしながらその提供されている楽曲がプロフェッショナルなオーディオかと問われると若干の疑問も残ります。それは楽曲を彼らが提供するにあたり「私たちリスナーにより良く提供しようとプロフェッショナルとしてかかわり出来上がった音」なのかという問題です。つまり提供するにあたり対価を得てのプロフェッショナルオーディオとして録音？しているのかということです。

ここで筆者は提言します。筆者の定義プロフェッショナルオーディオとは「私たちリスナーにより良く提供しようとプロフェッショナルとしてかかわり、出来上がった音」の「プロフェッショナルオーディオ」部分。

私たちに提供される音楽や音には昔から今日に至るまでプロもアマチュアもありません。なぜ音(オーディオ)にプロとアマチュアを区別しなければならないのでしょうか、想像ですが業界？が作った差別化だと思えます。

私たちが作ったものはそれなりの設備や機材を使い時間をかけて提供しているものでアマチュアのそれとは違いますよ。とい

うプライド？特に感じるのは設備の整った有名な業界企業の録音エンジニアにその傾向が見られるようです。

確かに機材メーカーはプロフェッショナルユース等、業務用と銘打ち高性能高機能の製品をコンシューマー用と差別化することにより売り上げに貢献してきました。開発へのかかわり方にはそれなりのこだわりもあるのでしょうか。スマホで8Kが撮影できる時代です。NTSCで放送が行われていた時代、今日のスマホと比較したら1000万もするTVカメラは・・・です。

プロフェッショナルオーディオとは「かかわり方」設備や企業ブランドとは関係ないのです。誤解を招きやすいプロフェッショナルオーディオという言葉、問題が多いのでやめませんか。

☆ 「音を考える」

プロオーディオって何？ V

さてプロフェッショナルオーディオと呼ぶはずなんて呼べば良いのでしょうか。

オーディオはオーディオ(音声)です。では私たちに提供される様々な音声媒体は？音楽は演奏、芝居やミュージカルは上演、映画は上映、と様々ですがいずれも作品と呼ばれます。

「作品とは人がかかわって出来上がったもの」まさにこの語に尽きます。作品を英訳すると「THE WORK」意味は作業・業務・仕事・作品です。作品のみを表現する時は「Opus」作品に演技や演奏という意味があると「Performance」と表現されます。

人がかかわるオーディオ作品、「作品」なのです。興味あるお話をしましょう。映画には様々な賞があります。有名なものにアカデミー賞があります。その中に作品に直接紐づけられる賞以外に音響賞と言われる賞、アカデミー音響賞(Academy Award for

Sound Mixing)です。以前は録音賞(Sound Recording) その後音響 (Sound) に変更現在はミキシングに変更されました。まさに音へのかかわり方に贈られる賞になりました。またエミー賞というものも有名です。主にテレビなど放送関係に贈られるものです。この賞のカテゴリー分類の中に工学エミー賞があります。産業技術に与えられる賞でかつて SONY が VTR 技術で受賞しています。音楽にかかわる賞には有名なグラミー賞があります。日本でもこの授賞式はアカデミー賞と同様に TV 中継されます。世界で最も権威ある音楽業界の振興と支援を目的とする賞です。カテゴリー別は 4 部門ですがかならずしもその範囲にはこだわらないとしています。現在までミュージシャン以外の受賞はありませんが作品スタイルが多様化している現在、ミュージシャン以外?のサウンドクリエイターが受賞する可能性は大です。もちろん舞台などに贈られる賞、トニー賞も有名です。カテゴリー分類の中には音響デザイン賞 (Best Sound Design of a Play) といったものがあります。いずれの賞も筆者のいう「音へのかかわり方」が賞の対象となっていることは事実です。

☆「音を考える」

プロオーディオって何? VI

音楽録音レコード制作は様々なアーティストはもちろんのことですがそれ以外のスタッフの参加は重要です。それぞれが作品(レコード)制作にどうかかわるか、製作ではありません。そのかわり方に参考になる DVD があります。有名なジャズレーベル「ブルーノート」の創設からのドキュメンタリーです。

ミュージシャンが中心のものですが作品へのかかわり方はエンジニアも同じです。



グラミー賞のトロフィーって蓄音器なんです。改めて知りました。イラストもレコードジャケットを意識してスクエア(正方形)にしました。(mo)

エンジニアのルディー・バンゲルダーは世界的にも有名でこの DVD にも登場します。創設者のアルフレッド・ライオンとフランシス・ウルフはナチス統治下のドイツからアメリカに移住、1939年ニューヨークで小さなレコード会社を立ち上げます。「ブルーノート」です。

バンゲルダーも参加しました。大切なことはこの2人はレコーディングにあたって、アーティストに自由な演奏と作曲を依頼したと創業者としてどう作品とかかわっていくかを追求した点にあります。

一時期資金難のため大手レコード会社にレーベルを売却しますが本来の作品にかかわる関係が崩れ、ミュージシャンも同様の関係に置かれることとなります。その後紆余曲折を経て再び「ブルーノート」をけん引することになります。ライオンとウルフの信念はアート全般、ヒップホップ等の音楽に現在でも影響を与え続けています。

この DVD は音、作品へのかかわり方の本質をミュージシャンのみならずエンジニアにも共通するものとして教えてくれます。バンゲルダーも単なるエンジニアとして

ではなく作品創りの表に立って技術的な問題以前に作品の持つ主張やその方法に積極的に参加しては是非機会があればご視聴ください。

ブルーノート・レコード ジャズを超えて

筆者の作品創り、音・音楽へのかかわり方のバイブルです。

☆次回は

道具のお話は先送り、予定していた DAC のお話、デジタルレコーディングでのピークの採り方、全て先送りになっています。誠に申し訳ございません。次回デジタルレコーディング、ピークの採り方など必ずお話します。

まだまだワクチン接種率の低い日本ですが、読者皆様が罹患しないことをお祈りいたします。また梅雨時でもあり健康には十分にお気を付けてください。次回もよろしくお祈りいたします。

— 森田 雅行 —